

きぶのさと

NO.103
月刊

第三輯 寺院篇 第二十一号
昭和四十二年一月一日 発行 (非売品)
岡山県都賀郡吉備町東町一五字垣方(時電四三七番)
岡山 觀老 協会

○ 八幡山大衆院 (その二)

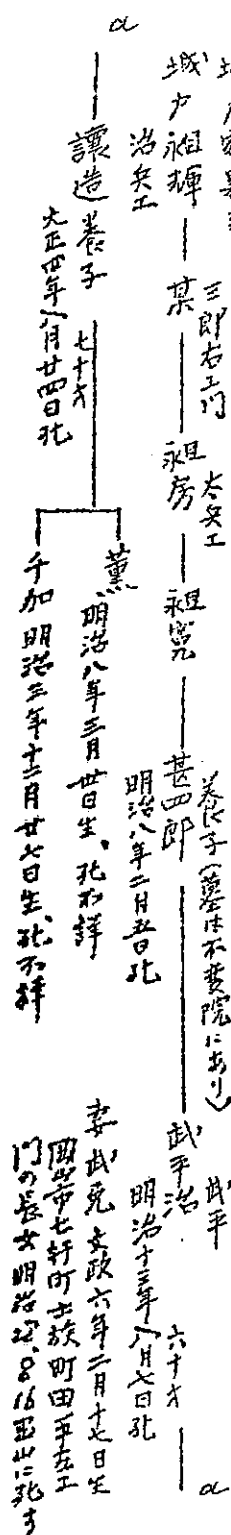
日親上人、上人は七一才の時諸国修行の旅せられて、東國に赴かれたこと十五回、北國へ往還せられたこと六回、その望霜六十一年に及び寺院を建立すること三十六ヶ寺、公武のことに関して諫争すること八ヶ度、他宗との法論六十六回、堂宇を破壊、毀損せられたこと数回、また拷問禁獄の責を受けること数回、苦難の生涯を終えて縁起になつた。翌長享二年(一四八八)九月十七日八十二歳の高齡で示寂した。よつて本法寺を筑前國法性寺の住職日親上人に付嘱された。遺骸は鳥辺山に茶毘に附しここに御骨を取めた。もと逆修の石塔を建てたが後ちになつて鳥辺山本寺寺といふ寺院を興したのである。一家の本寺といわれる京都の本法寺は始め西條綾の山路に建て後ちは一條堀川之地に移し、後ちまた豊臣秀吉が聚樂亭を創築するに當つて正中山第三世の中興功德院日通上人が天正年中に現今の地を相して移轉し堂主に就いたのである。

元來日蓮宗は(第三輯)寺院篇緒論に述べた)他宗と異り然火の如き宗旨にして、急激派は一念佛無別釋天覺と眞言と國律國賊しを妄向からあべせかけて温和派に対して折伏(敵をくじきて服従さす)をはげしいものであつた。殊に日親上人は此の旗幟で「誘法者、惡智識、逆罪人」などと稱し、昔の不受不施派の宗旨と同一視され、今日の創価學會の行き方がこれによく似てゐる所がある。

△ 七条院墓地にある主要な墓標 城戸氏の墓石 (板倉氏家臣)

- 一、我禪院 宗受日輝居士 明治十年八月七日享年六十歳城戸武平治(不斐院に位牌あり)
 - 一、寂光院 妙法日修大姉 (蓮修) 明治八年五月十五日享年二十八(娘か)
 - 一、戒定院 妙受日龜信女
 - 一、梅光院了壽信士 享和二年壬戌正月廿二日城戸太兵衛源祖房墓 (不斐院に位牌あり、此には梅老を梅香、花香を華香とあり)
 - 一、花香院 妙壽信女
 - 一、鉄岑一壁居士 宝永三丙戌曆七月十七日俗名城戸平兵衛 (不斐院に位牌あり)
 - 一、本深院 実成日修信士 安政六己未年七月十八日行年六十五才城戸三郎右エ門源祖寛
 - 一、深達院 妙修日実信女 安永五丙申年閏十二月廿日 (不斐院に位牌あり)
 - 一、岩穀院 妙奇日照大姉 享保二十乙卯歲五月十八日
 - 一、井立院 宗休日信居士 宝曆十二壬午年二月二日 女名城戸兵治兵衛祖輝
 - 一、隨義院 妙休日実大姉 明和二乙酉年八月十八日 (この墓石と位牌は不斐院にあり)
- 墓名中の鉄岑一壁居士は元禄十六年の板倉侍帳に寺社町奉行三十人扶持城戸平兵衛とあり、他の戒名と異つてゐるようは一徹奇骨のある士であつたらしく、町人どもに恐らるべからざることか想像せらるる。多分は金力の世の中で金によつて戒名がかわるのであるから將來は死名のわたり名によつて懸るべく、此の人の人柄を想像することは難しい。享保十四年の改侍帳に郡代並町奉行十五人扶持城戸三郎右衛門。明治二年の改侍帳には御近習給人十右三人扶持城戸武平治とあり城戸氏は代々板倉家の諸代の臣である。

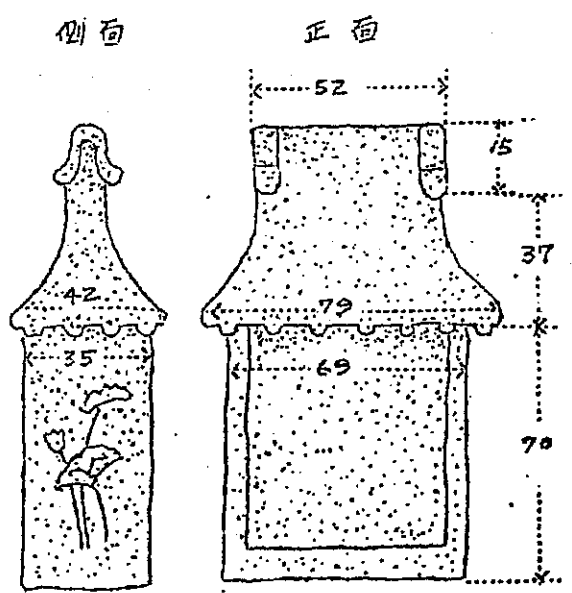
○ 城戸家畧系



○ 橋本氏の墓石

一 秋岳寺清口信士 宝永七庚寅閏八月廿九日 俗名橋本時右衛門正亮
 縁学妙淨持尼 (系統は詳かでない。戒名からして日蓮宗でない)

一 伽藍塔婆 一基 豊島石造にしてもと前面に両
 面きの石の戸扉があつたが、いまわらない。内部
 正面に「南無妙法蓮華経」の題目が彫られてい
 たが埋滅して眼にうづらない。
 左縁に「笠井甚右衛門」。右縁に「明曆ニ〇〇正
 月十一日」の刻文がかすかに読まれる。この墳墓
 は庭瀬藩主戸川氏の侍帳に笠井甚五兵衛藤大夫
 高五十石 大工頭外三人扶持とある。「明曆ニ
 〇〇」は明曆の内末の歳に当り二代藩主戸川正安の
 時代にレレく或は甚五兵衛の子ではないかと思わ
 れる。



○ 佐藤氏の墳墓 (戸川氏家臣)

- 一 直岳院義徳信士 権川藩中佐藤興次兵衛藤原栄成安政五戊午年九月十三日卒
- 一 義宣院妙敬信女
- 一 是則院保内信士 明治廿三年七月廿一日没 佐藤吉三九歳 辰辰行年七十有一
- 一 是成院妙持信女 明治廿六年五月八日没 妻 佐免 行年七十九
- 一 玄菟院淨心信士 明治三庚午閏十月六日 佐藤真吉
- 一 温厚院法暎信士 大正十一年拾月十六日没 佐藤龍江藤原義勝行年七十三才
- 一 温行院妙実信女 明治廿四年二月九日没 妻 加收行年四十三才

- 一 賢勝院法老信士 明治四十二年十一月十六日没 佐藤龍江二男勝熊行年二十才
- 一 智香院妙進信女 明治四十四年五月廿一日没 佐藤龍江二女 富行年廿五才
- 一 寂照院妙事信女 大正五年七月十一日没 佐藤龍江長女 寿恵享年廿有五
- 一 智月院妙季瑛子 大正十一年三月 佐藤良雄次女 行年二十才
- 一 是生院温良日雄居士 昭和廿二年六月十二日卒 龍江長男佐藤良雄天寿六十有四年
- 一 是名院温妙日静大姉 吉備郡高松町原右才四三三桐野市大郎妻女俗名佐藤静代
- 一 萬尊院温情日正居士 本籍地都窪郡吉備町下権川四百二十三番地良雄長男俗名正雄
- 一 慈芳院妙蓮日香大姉 久米郡福原町鶴田二十六番地佐藤逸太郎次女妻香登利
- 昭和廿一年六月廿九日卒行年四十二才

佐藤氏異家

佐藤栄成 吉三九 成貞 龍江 妻静次 妻香登利
 妻佐免 妻か収 良雄 正雄(当主)

権川領主戸川氏の家臣にレレて、明治四年奉還金六拾九兩祥領佐藤吉三九とあり。御里を去つて岡山市に移住、現在下之町四十五番地にて屋敷を三笠屋と云う権領商を管心する。

○ 植木氏の墓標 (権川領主戸川氏の家臣)

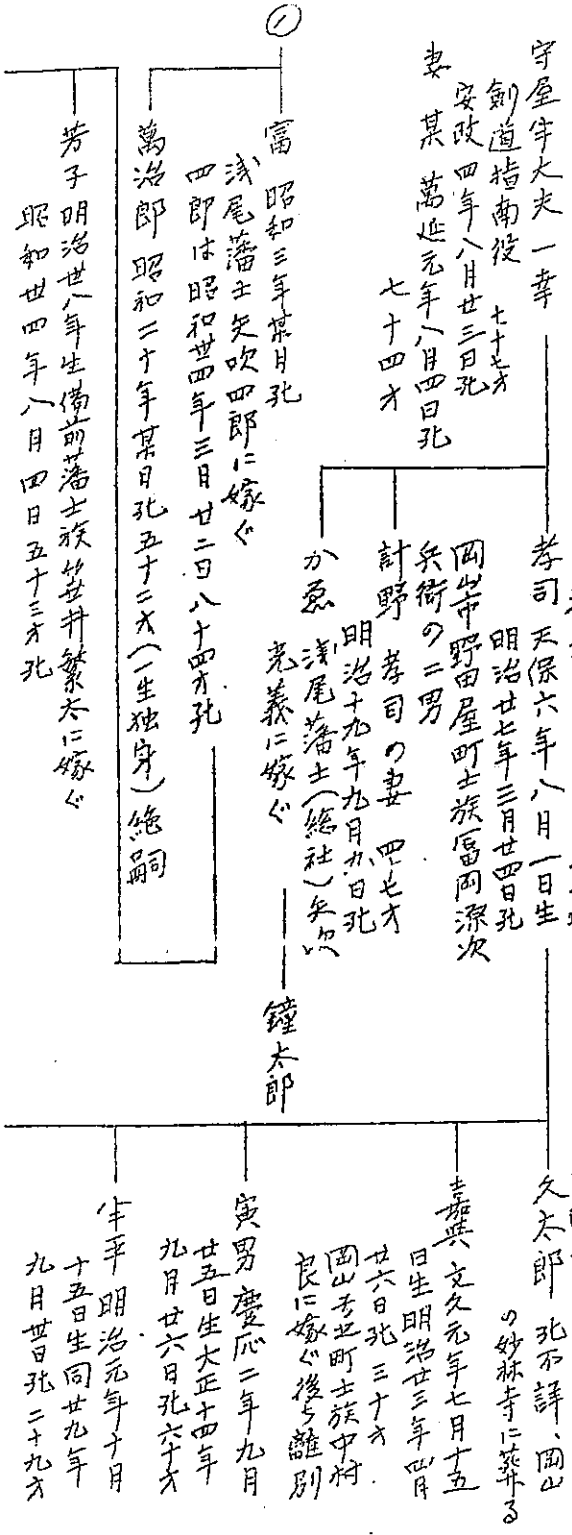
- 一 本身院宗円 寛政六甲寅九月廿一日佐伯屋藤四郎
- 一 本成院妙内 寛政十一日未六月廿一日備中倉敷小山の次田屋より入嫁某七十一才
- 一 如是院志充信士 享和二戌年八月十七日佐伯屋藤治郎
- 一 当知院妙寿信女 文化四卯年七月廿八日 (妻某)
- 一 梅月院月鏡信士 文化二乙丑五月十九日 俗名水上藤四良 五十七去
- 一 秋月院妙境信女 文化八辛未八月十一日 藤四良 妻 安五十歳去
- 一 法音院妙竺大姉 文化十二乙亥年七月廿七日植木藤四郎 妻 直
- 一 儀松院日翁居士 天保十三寅年九月四日 植木藤四郎
- 一 松林院妙榮大姉 天保十四卯年五月十六日 同人 右妻
- 一 明治四年戸川家臣奉還金拾兩祥領、子孫は神戸市東灘区に住す。

第九輯系譜藤植木氏の項参照せらる

○ 守屋氏の墓標 (板倉氏の家臣)

- 一 高遠院実淨信士 安政四丁巳年八月廿三日 守屋半大夫一幸 寿七十七才
- 一 高毅院妙淨信女 萬延元庚申年八月四日 同人 妻行年七十四才
- 一 武貴院祐弘日泰居士 文久三癸亥六月十八日卒 守屋平夫一知 行年五十五才 信受院妙持日行大姉 (逆修)
- 一 武劍院勇太日太居士 (逆修 孝司) 明治十九丙戌年九月九日歿 守屋孝司 妻計野 享年四十七歳 如説院妙修日行大姉 明治十四年九月廿六日卒 行年六十才 守屋寅男妻婦之墓
- 一 信得院宗道日持居士 大正十四年九月廿六日卒 行年六十才 守屋寅男妻婦之墓
- 一 信受院妙持日行大姉 (逆修)
- 一 勇進院義貫日照居士 明治廿九年九月廿日卒 守屋半平 享年廿九歳

△ 守屋氏畧系



文子 岡山市大正町に住す
 幸子

△ 畧系中の矢吹氏は代々浅尾藩の家臣にレテ維新当時藩主藩田備中守本孝に仕へ尚守居役兼祐筆を勤む。慶応二年の浅尾騷動にはその姓を免かれ浅尾藩右側の参事となり傍ら農業を営む。小学校令によつて明治十一年に香川県仲多度郡平島村江ノ浦の小学校長となり同村に永住した。

△ 守屋氏は板倉家臣帳に(櫻藩当時)外禄御徒士小姓禄高六石三人扶持守屋孝次とあり。元治元年の未成る晩のこと、長州の浪士数名が突然に櫻藩の大手門をたたき藩主に面談を迫まつた。用件は倒幕の旗上げに板倉氏を引き入れて軍用金徴發の強要にヤツテ来たのである。固老森岡武從が応接した。藩主(勝弘)は国事多端のため不在中なので儼かに返答は出来なかつた。三日台に再び立寄るから何とか返事を頼む、とつて立ち去つた。藩主は在藩であつたが還早くこの知らせを聞き、床に入ろうとした時であつたが危険を避けて袒袍姿のまま指南役守屋孝司等居強の家臣ニ三人を連れ衣の水門から小坂に乗り堀江を下つて関戸まで逃げ、船中夜を明かしたという。

守屋氏の屋敷は大手門を入りすぐ左側に替古揚りあつたその東奥でソまは畑地となつて跡形もない。

△ 当山歴代の任職 確實な資料は何にもないが墓標と位牌などによつて列挙した。

- 一 光孝院中興至善日住大徳 安永八日亥年十一月十八日 (有墓)
- 二 玄妙院日用聖人 寛政十二庚申年五月十八日 同

三 日弓上人 文化ニ乙丑年生島根県神道郡入南村足立金三郎の次男、同九年四月八日栴江市慈雲寺にて得度し大衆院住職となる。(北不詳)

四 志達上人 文政元戌寅年生岡山県英田郡倉師村(林野)岡平友造の三男、姓は黒田忠達 (北不詳)

五 当院十二世善樹院日学聖人 天保九戌戌年四月十三日 (有墓)

六 了順院日幸大徳 安政ニ乙酉年四月五日 同

七 慈浄院日利大徳 安政五戌午年十月七日 同

八 妙実院日覚法尼 俗名 吉田妙実 (北不詳)

九 当山十九世本達院日魂聖人 明治廿三年九月廿五日 (有墓)

一〇 慈妙院日正上人 昭和廿四年四月十七日六十六才俗名黒沢玄善 茨城県高萩郡松岡町出身

一一 日玄 現住 俗名黒沢親頂 以上

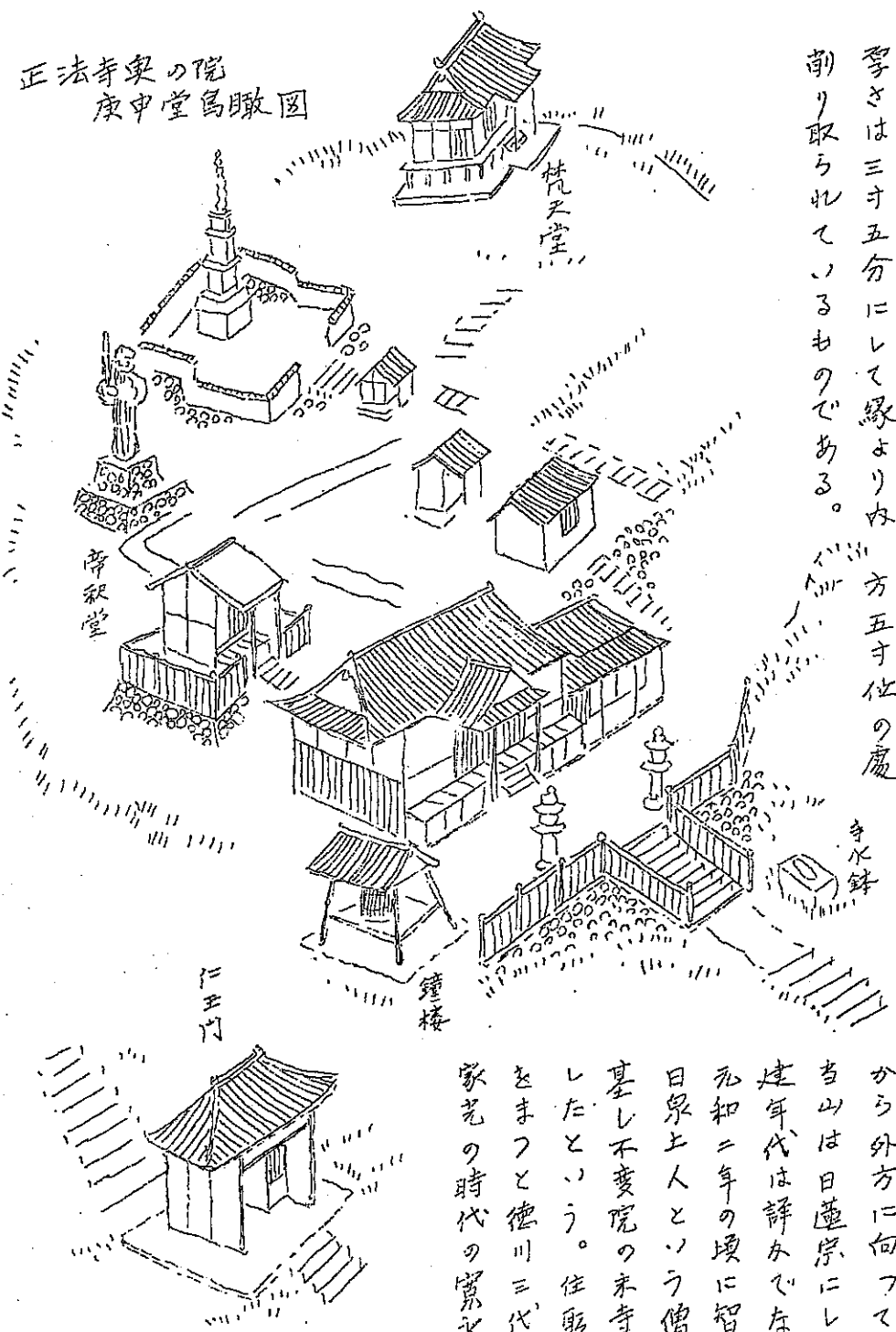
◎ 浄泉山正法寺と庚申堂 花尻の街道の左路傍に「庚申堂へ近道」と書いた道標がある。この道標をたよつて二町程の狭い山道を通ると右側に正法寺がある。山門を潜ると蕎麦屋根に臥葺の疵を附け本堂、庫裡、客殿を兼ねた建物である。

山門の横には高さ六尺ばかりの石碑がある。主石に「明和四丁亥年三月十三日、南無妙法蓮華経 当山中興開基 日道 施主 伊原氏」の銘がある。

門内の右は歴代の住職の墓標が数基ある。左側に「智覚院日應聖人」文化五年戊辰四月十四日、「地徳凡以五石及帝釈堂大神寺三所寄附之 当山十七世 智覚院代」とした住職の墓がある。その横に高さ五尺ばかりの石碑に「明和ニ乙酉七月十三日 南無妙

法蓮華経 宗祖日蓮大菩薩 施主 伊原氏 当山中興日道代」と刻んである。次の傍に無銘の板碑がある。地上高さ四尺、横二尺五寸。これは附近の古墳から發掘したものを建てた石棺の蓋覆である。掘り替へせば現形は推定して六尺は中うにあると思われ。厚さは三寸五分にして縁より内方五寸位の處から外方に向つて薄く削り取られてゐるものである。

当山は日蓮宗に於て創建年代は詳かでないが元和二年の頃に智内坊日泉上人という僧が開基し不変院の末寺に属したという。住職の言をまつと徳川三代将軍家光の時代の寛永十五



家光の時代の寛永十五

年の頃に岡山市の蓮昌寺の住職正蔵院日定上人が法難を避けてここに隠棲して草庵を結び、大梵帝釈の二天王を勧請して祭祀したのが、いまの奥の院である康中堂である。よつて日定上人を当山の開山と仰ぐのである。

尚末幾百年庶民の信仰を受けて幸運は益々隆盛を極め、宝暦の初年の八月日直上人の時代に背右の神本山へ倍に牛飼山ともいうべきを抱擁した地域を寺領とし、諸堂宇をも増築した。そこで日直上人を当山の中央の祖とするのである。其の一盞一衣、無任の時代も流き堂坊は悉く廢壊して康中山にある梵天堂其の他一ニの小祠を遺すのみとなつたが、漸次復旧して今日に至つてゐる。

康中山の奥の院に登る参道は当寺の傍から北へ山路を辿つて行くのである。途中左側に天満宮がある。この宮は西花尻分の女神である。ここから康中の池のほとりを通つて松樹に包まれた數十段の礎を踏んでいくと西法造軍曹本願屋根の仁王門に出る。

右には持国天王、左には毘沙門天王（多聞天王とも）の尊像が安置されてゐる。本建立後、経緯の不明なる大石を撞落して、安永三三の迄と搦まされた。造立の不明であるが優美な佛像にして一見するにその技法は名工の作と思われぬ。

ここから更に急な石段をのぼると石の玉垣があつて右に手水鉢がある。石の玉垣には「撫川西向難波常造、都宇郡妹尾町西磯講中、東花尻在安曾平次、延友岡崎かつ、都宇郡右新田小林牧平、撫川東町水島仁吉、当所難波春三郎、東平野大田宗一郎、東平野佐藤勝一などの姓名が刻んである。この寺母者から推察して右のものではなく明治の初期の建立である。

手水鉢の銘には正面に「奉寄進し。左面に「宝暦八戌癸酉九月吉日」。右面には「願主 宮田慈左衛門敏辰 永井新五右衛門次繁 杉浦惣右衛門保正 敬白し。とある。三人はいづれも板倉氏の重臣である。

漸く康中堂の前へ出る。左に鐘楼と両側に列んで石灯籠がある。石灯籠の銘に右は「淨泉山正法寺 第八世 親達院 日道代 備前岡山講中九人 宝暦九年己卯三月吉日」。左は「淨泉山正法寺 歷代 日道代 (花押) 宝暦十三歳癸未三月吉日 施主 原氏」と彫つてゐる。

前にも述べたが日直上人は中央の祖で、この時代に大いに奉養されたようである。伊原氏はその系統は明らかでないが熱心な当山の信者であったことと諸碑の銘にあらわされてゐるのを知ることが出来る。当山は昔から祈禱寺にして孝族はなく居士の寺ははなはた少くある。

康中堂は赤銅葺屋根の流造、神佛混淆時代を思わせるものである。鐘楼の梵鐘は昭和十一年頃大東亜戦争に供出されて永く無鐘のままであつたが、当山の住持人難波重吉、江口親志、片岡昇太郎、山形芳蔵、熊代熊太郎、熊代照夫、吉井照夫らの手によつて寄附金を募つて九年後の同廿五年に再鑄造した。

(おわり) この項未完

合名会社
吉備整経所
 山陽線庭瀬駅前
 吉備電話 | 8番
 有線 | 808

吉備町平野・国道筋
トモエ葬儀社
 吉備電話 44